

執着心薄めのイケメンが改心して、
溺甘スパダリになった話。

目 次

執着心薄めのイケメンが改心して、
溺甘スパダリになった話。 5

番外編 愛を継続させるコツ 251

執着心薄めのイケメンが改心して、
溺甘スパダリになった話。

プロローグ

クリスマスといえば、家族や友達、恋人達が、思い思いの場所で楽しむ日だ。

ゴーン、ゴーンと、近くの教会で鐘の音がする。今日はクリスマスなので、ミサを執り行っているのだろう。

「あたし達、別れましょう」

華やかな街。賑やかな雑踏。キラキラと夜を彩るイルミネーション。

世間は浮き足立っているというのに、俺——御影知基は、付き合っていた彼女から突然別れを切り出された。

（ああ、こういうのってなんと叫びたっけ。中学生くらいのころ、授業で習ったような）

ゴーン、ゴーン。

無機質に響く鐘の音。目の前の女性が別れを口に出しても、俺の心はまったく動かなかった。なぜなら、いずれ別れるだろうと予感していたから。

「祇園精舎の鐘の音——」

「は？」

「あ、いや、気にしないで」

—— 諸行無情の響きあり。

祇園精舎の鐘の音には、この世のすべての現象は絶えず変化していくという響きがある。意味はそんなところだ。うん、思い出せてよかった。

「別れるんだね。了解。それじゃお世話になりました」

ヒラヒラと手を横に振って、俺はきびすを返して帰ろうとする。するとグイッとコートの袖を掴つかまれた。

「ちよつと、なによその態度。あんまりじゃない!？」

「え、だつて別れたいんだろ？」

「それは……っ、だつて、知基が悪いんじゃない。私はずっと待つてたのよ。このクリスマスのデートできつとプロポーズしてくれるつて信じていたのよ。なのに、あなたは何も言わないじゃない!？」

恋人だった彼女の表情は、悲しみと怒りで溢あふれていた。

別れ際の恋人は、いつだつてこんな顔をしている。

俺になにを期待していたのだろう。ああ、わかっている。わかっではいるんだけどね。

「最初に言つただろ。俺は結婚する気ないよつて。それでいいと言つたのは君じゃないか」

パン!

明るいムード満載の街のど真ん中で頬を叩かれ、いきなり修羅場しゆらばとなる。

「最低……っ!」

「なにが最低なのかわからない。付き合つたら、俺が心変わりすると思つたのか？」

ひりひりする頬に手を当てながら、無表情で尋ねる。

「せっかく、付き合っている時は楽しかったのに。こんなふうになつて残念だよ」

俺との付き合いに飽きたら、笑つて「じゃあ解散!」つて感じで別れてくれたらしいのに。どうして別れ際はいつも湿ぬっぽくなるのだろう。そして、俺に怒りと悲しみの視線を向けてくるのだろう。

何度女性と付き合つても、そのあたりがわからない。

「別れようつて言つたのはそつちなんだから、これ以降はメールや電話しないでね。ほら、次の彼女ができたら、その子に悪いしさ」

にっこり笑つて言うと、恋人だつたけど今は他人になつた女性が、わなわなと唇を噛みしめて俺を睨にらみ、グルッと背を向けて走り去つていく。

「はあ、めんどくさ」

おつと本音が出てしまった。でもしょうがない。

こんなだから、俺は友人でもある同僚の保田ほったから呆あきれられているんだろう。

俺が勤めているところは、株式会社トピカルシード。

野菜や鑑賞花など様々な種子の研究を手がけており、その成果を業者に卸している。俺は営業部で、主に販売ルートの開拓が仕事だ。

正月休みが明けた初日の出勤。さすがに皆、気だるそうである。

俺も例に漏れず、デスクについた途端にふわあと生あくびをした。

「あけましておめでとーさん」

隣のデスクについた保田が声をかけてくる。俺は顔を上げて「おう」と返事した。

「あけましておめでとー」

「ところでクリスマスデート中に修羅場して別れたんだって？」

「どこから聞いたんだよ。情報早すぎ」

はあ、とため息をついた。同僚の保田定義とは、今のところ一番気があっているので、頻繁に飲みに行く仲だ。

「正月休みの間に、メッセージアプリの一部のグループ内で広がったんだ。総務部の仁科さんだろ。」

彼女が自ら言いふらして、主に総務部の女性社員達に慰められていた」

俺はため息をついて、頭を抱える。

「なんでそういうことするかね。社内で俺の評判が悪くなるじゃないか」

「今更だろ。『結婚しない王子様』」

保田がくすくす笑う。俺は「やめてくれ」と渋面になった。

そのあだ名は、主に女性社員の間で広まったものだ。個人的に大変不愉快である。

相貌が整っているというのは、得なのか、損なのか。自分の顔は嫌いではないし、この顔で得したこともあるので、まあ損ばかりというわけではないだろう。

代々政治家というご大層な血筋を持つ父と、世界的ファッションデザイナーの母の間に生まれた俺は、たいそう裕福な家庭ですくすく育った。

持ち前の素材——顔の良さを生かし、小学生から大学卒業まで母のブランドで専属モデルを務めていたから、貯金はそれなりにある。

けれども俺は自分で言うのもなんだけど、割と質実剛健というか、贅沢にあまり興味がなかったので、貯金だけはやたらある一般市民だ。老後は安心なので、特に将来に悲観はしていない。

こんなふうだと、さぞ人生勝ち組なのだろうと、うしろから石でも投げられそうなのが、俺は俺で切なく悲しい事情がある。

よくある話だ。両親には愛がなかった。ふたりの愛の結晶であろう俺に対しても、特になかった。

だが、その実、両親にはそれぞれに愛人がいた。週刊誌にも気取られないほど、鮮やかに隠しきって、お互い好きなように生きている。

俺は複数のベビーシッターに育てられて、親から教育を受けたことはなかった。

……ふたりは、どういう経緯で結婚したのだろう。最初こそ、愛はあったのかもしれない。

しかし、愛はうつろいやすい感情なのだろう。だから『結婚こそが幸せ』という考えが、俺には理解できない。だから結婚はしたくない。婚姻届という紙切れで、俺の人生を縛られたくない。

もしかすると、女性にとつて結婚とは、幸せの確約というより営業の契約に近いのかな。

営業が契約書を頂いて達成感を覚えるように、女性は婚姻届という契約書で達成感を味わうのかもしれない。

退屈な朝礼が終わって、仕事開始だ。年始なので、主に卸売業者や契約農園への挨拶回りである。営業においても、持ち前の顔の良さは武器のひとつだ。幼少時から他人に囲まれて育ってきたので、愛想良く振る舞うのは得意である。

お昼を過ぎるころには営業担当先への挨拶回りを終えて、会社に戻った。

「ただいま帰りました……」

「おかえりなさい。そしてあげましておめでとございます！」

営業部フロアの扉を開けた途端、やたらテンションの高い声が迎えた。

「げっ、当真！」

ズサツと後ずさった。目の前には、トレードマークの黒縁眼鏡をかけた、白衣を羽織った女性が、当真汐里。彼女はウチの種苗研究室で働く研究員だ。そして、今のところ俺が最も苦手としている女性である。

彼女は嫌がる俺の近くに寄ってきて、犬のようにくんくんと鼻を鳴らした。

「匂う。匂いますね」

「な、なんだよ。別に匂わないぞ」

「いいえ、匂う！ この匂いは、ひよの農園さんから頂いてきたであろう新種の花の匂いです。」

『トウマよ、ワタシを研究しておくれ』って、呼んでいる声が聞こえませんか」

「聞こえるわけないだろ！」
思わずツッコミを入れた。

当真は、うちの社内では有名人である。大学院卒で、めっぼう頭がいらいしいが、とにかく言動が個性的なのだ。しかし研究にかけては彼女の右に出るものはいないと言われている。

これまでも、画期的な品種改良や高品質な種子を作り出すことに成功している実力者なのだ。社長すら一目置いているほどの研究員らしいが、俺にとつては単なる変人である。

当真は俺に向かってニッコリ微笑むと、サツと手を差し出した。

「どうわけで御影さん。お正月ですし、お年玉を下さい」

「当真は大人だろ。お年玉はあげません」

「そこをなんとか！ 四の五の言わず、農園でもらってきた花を下さい」

当眞は、まるでお代官様に頼み事をする庶民のように「ははあ」と両手を出して頭を下げた。俺はため息をつく。

ふざけているように見えて、当眞はいつも大真面目だ。

しかし、彼女と話していると疲れる……。諦めて、ビジネスカバンを開けた。当眞の目がきらきら輝く。

好意であれ悪意であれ、他人が俺を見る時はいつもこの顔だ。しかし当眞は俺の顔よりも新種の花や野菜の入ったカバンのほうばかりを見ている。

いつも、なぜか、ちよつとだけ、おもしろくない。

契約農園では、うちが品種改良した種子で作物を育てている。しかし時々、偶然が重なってまったく新しい品種ができる時があるのだ。俺達営業は、そういう種子や作物を回収しては研究室に提出する決まりになっていた。

だから、当眞に渡すのは当然なのだが、なんとなく癪に障る。今日もさりげなく研究室に寄って適当な研究員に渡そうと思っていたのに、当眞は犬並みに鼻が利くのか、俺が新種を持って帰ってくるたび、自ら営業部までやってくるのである。

「はいよ」

しぶしぶ、農園からもらってきた花を渡した。ファスナーつきのビニール袋に入れているのに、

どうやって嗅ぎつけているんだ、この変態当眞は。

「はあ〜つ、やつぱり思ったとおり。この青みがかった百合……間違はなく、偶然が生み出した新種です！ ありがとうございます！」

当眞は花が開くような満面の笑みを見せた。

思わずドキッと胸が高鳴る。やめてくれ。なんで当眞なんか胸をときめかせなければならなんだ。こういう所も苦手なのだ。変人のくせに、笑顔だけはとびきり可愛いなんて。

「あのさ……」

俺がなんらかの言葉を口にしたその瞬間、当眞はパッと横を向いた。

「吉津さん！ あなた今、国立大学の研究所から帰ってきたばかりですね!？」

「ひっ、なんでわかるの〜！」

営業から帰ってきたばかりの女性社員、吉津に、当眞がずんずん近付いていく。そして俺の時と同じようにクンクンと鼻を鳴らした。

「ふふふ、匂うんですよ。国立大学独特の、インテリジェンス〜な匂いです」

「そ、そんな匂いしないってば〜！ もう、当眞さんったら変態！」

「私は純粋にサンプル種子が欲しいだけなんです。下さい！」

「うう〜、どうして私が国立大学に挨拶しにいつて、話のついでにサンプル種子を頂いたことを察知してるのよ〜」

吉津は顔を引きつらせながら、カバンからそれを取り出した。

「もう、あとで研究室に持っていこうと思っていたのよ。わざわざコッチまでこなくてもいいのに」

「いやあ、匂いがするとどうにもソワソワしちゃって。研究が手につかなくなるんですよ」

当眞が照れ笑いをする。

「だから、そんな匂いしないってば！」

すかさず吉津がツッコミを入れると、当眞はいたって真面目な顔をして、黒縁の眼鏡をきらんと光らせた。

「いいえ、実はするんですよ。そのうち吉津さんもわかるようになります」

当眞の断言に、吉津が疲れた顔をして額を手で押さえた。

「もはや怖いわ」

ため息をつく吉津。その気持ち、とてもよくわかるぞ。俺もため息をつきたい。

「マッド当眞に狙われる被害者は、日に日に増していくなあ……」

近くにいた同僚達がぼそぼそと小声で話し始めた。

「あの嗅覚、犬も超えてるレベルだよな。顔は結構可愛いのに、中身が変態すぎて残念だわ」

その意見にはまったく同感だ。でも、当眞を可愛いつて言うな。そういうのに気付いていいのは俺だけなのだ。

……ん、なんでそう思うんだろう？

俺は、いつの間にか自分が酷く不機嫌な顔をしていることに気が付いた。

なんで、こんなにも不愉快なんだろう。

俺が当眞に話しかけようとした時、彼女の視線は別のところに向かっていた。

彼女の目的はいつでもサンプルや新種の種子で、俺は眼中にない。持って帰ってきた人間自体には興味がないと言わんばかり。

いつもそう。当眞の目に映るのは研究対象だけなのだ。

別に悪いことじゃない。研究熱心なのはいいことだ。会社への貢献にも繋がるし、研究者として当然の態度と言える。

だが、俺の自尊心は微妙に傷付いた。俺自身に興味はないのかと問い詰めたくなってしまうのだ。なぜだろう？ わからない。

答えが出ないものを考えるのは時間の無駄だと、いつもはそう考えて気持ち切り替える。

考えても仕方がないと、思考自体を切り捨てる。

それなのに今日はどうしてだろうか、そんな気になれなかった。

いや、今日が初めてじゃない。しばらく前から、俺はそうだった。

相手は種の匂いを嗅ぎ分ける変人なのに。初めて会った時からそうだったのに。日に日に彼女を気にしているような気がする。

新種の種や苗を持ち帰っていないければ、営業部に寄りつきもしない彼女の態度に、勝手に腹を立てているのだ。

その理由は——いまだ、見いだせずにいた。

「それはさ、そろそろ自分のやっつてることの虚しさ^{むな}さに、気付いたからじゃねえの？」

その日の夜。会社帰りに寄った居酒屋で、保田が枝豆を口に放り込みながら言う。

「虚しさ？」

焼酎ロックを飲み、俺は首を傾げた。

「いろんな女と付き合っても、一度として長続きしたことはないし、お前自身は結婚願望もない。

そんな時に、当真みたいに研究バカで異性にまったく興味を示さない女を見てしまって、自分のやっつていることがまったく無意味だと理解したんだよ」

「……なるほど」

保田の言っていること、なんとなくわかる気がする。

俺に結婚したいという気持ちがない限り、その願望がある女性と長続きしないのはわかりきっている。そういう女をとつかえひつかえして遊ぶよりも、当真みたいに自分のやりたいことをやって生きたほうがずっと幸せになれるのではないか。

俺は別に、常に女の子と付き合いたいわけではない。

ただ、誘われたら基本的に断らない。そういうスタイルでいるだけだ。

でも結婚しないまま、ずるずる女と付き合うっていうのは、なかなか不毛である。それならいつそ、ばつさりとすべての誘いを断って、一人でいるほうが楽しいのではないか。

そのほうが、ずっと人生を楽しめる気がする。

……当真に対してずっと苦手意識があったのは、彼女が自分の思うまま、我が道を進んでいるように見えていたからなのか。俺は無意識のうちに、そんな当真を羨^{うらや}んでいたのかもしれない。

研究や実験が大好き。自分を偽^{いつ}らず、飾らず、変態と言われても気にせず、やりたいことをやる。彼女のそんな生き方が、俺には眩^{まぶ}しかったのだろう。

「はあ、いいねえ。自分に正直に生きられるなんてさ」

「お前も正直に生きてるじゃん」

保田がそう言った時、スタッフが「塩焼き鳥お待ちい！」と、テーブルに料理を置いた。

俺はねぎまの串を持ち上げて、ふりふりと振る。

「こう見えて、いろいろ気を使って生きてんですよ、俺は」

「それは失礼」

保田がおどけたように笑って、つくねの串を取る。

「俺が自分に正直になつたらさ、友達も彼女も皆ソッポ向いて、いなくなるよ」
ぱく、とねぎまを食べる。

結婚願望はないけど、暇つぶしに付き合いたい。ひとときを楽しめるならそれでいい。こういう男を、世間では『不誠実』だったり『ろくでなし』だったり、ぼろくそに詰るのだから。

最初に結婚の意思はないと告げて付き合い始めたとしても、遊び気分で見られるのはせいぜい一ヶ月くらい。三ヶ月も経てば、嫌でも結婚を意識する素振りを見せられる。そして、こっちに結婚願望がないとわかれば離れていくのだ。だから一応相手の気分を害さないよう、できる限り結婚の話題は出さないようにのらりくらりとかわしている。……でも、そんなのは時間稼ぎにすぎなくて、結局は女性のほうから切り出されて、俺は結婚を断って、怒られて、別れる。

去年のクリスマスのように、しびれを切らした彼女が俺の頬を叩くこともよくある。

「当真……か」

ねぎまを食べて、串を串入れに放り込み、頬杖をつく。

あいつは男と付き合いたいと思ったことがないのだろうか。寂しいとか、思わないのかな。

「——あ」

「どうした？」

カシスソーを飲んだ保田が首を傾げる。

「いや、今、すげえ嫌な自覚をってしまったんだ」

額に手を当ててため息をつく。

俺が当真のような生き方ができず、ずっと意味のない付き合いを繰り返しているのは。

寂しい——から、ではないかと。

そんな情けない自分自身に、気付いてしまったのだ。

寂しい、でも結婚はしたくない。でもひとりには嫌だから、約束はしないで誰かと付き合う。

どう考えてもクズ男の思考だ。

けれども、俺が夫になれば相手は絶対不幸になると思うし、俺は結婚しないほうがいいタイプだと思う。

人の気持ちはうつろいやすいもの。永遠に続く愛なんてない。

それは相手にも言えるし、俺にも言える。

結婚して子供をこさえたとして、そのあと、他に好きな人が現れたら？

さすがに不倫に走る趣味はない。でも、誰かに恋をした時点で、伴侶への愛情はなくなるだろう。そうしたら、あとは地獄だ。愛情を向けられない相手に義理を果たすだけの人生を送ることになる。そんな人生、どう考えても楽しくない。それならはじめから結婚なんてしないほうがいい。

——この考えが、どこか歪んでいるなんて、とっくの昔に気付いている。

保田と別れ、夜中の繁華街をひとり歩いた。

駅まであと五分というところ。終電までにはまだ余裕がある。

「当真……か」

息を吐くと、白いもやがネオンで明るい夜の街に溶けていく。

寒いな。マフラー、新調しようかな。

俺は首に巻いていたマフラーをぎゅつとしめ直すと、コートのポケットに手を突っ込んで歩を進める。

当真汐里。

個性が強すぎるのが原因か、あまり『女らしさ』を感じない人だ。

かといってガサツな感じもしないし、男勝りおとこまねってわけでもない。うまく言えないが、性別を超えたところに彼女はいて、とてもナチュラルな雰囲気を持っていた。

悪い意味での『女臭さ』を感じない。だからこそ俺は、彼女に初めて出会った時から今まで、恋愛対象として見てこなかったんだろう。

でも、そういえば俺は、当真と初めて会った時からずっと、彼女の姿を視線で追っていた。

それは強烈な個性が気になってしまいうから……だと思っていたけれど。

コツコツと冷たい靴音は、ざわざわした雑踏にかき消される。正月明けでも、都内の繁華街は相変わらず騒がしい。

突然、ポンと肩を叩かれた。

「お兄さん、飲み足りない顔してるね。いい子いるんですよ。今なら飲み放題で二時間、四千

円……どうです!？」

典型的なキャバクラの客引きだ。

俺は手をヒラヒラさせてにっこり笑う。

「俺、この顔で売ってるほうだから。ごめんね」

自分の顔を指さすと、客引きの男は「あゝ」と納得した顔をした。そして、謝罪もなく次のターゲットを探しに行った。

あの納得顔は、俺の職業がホストだと思ったからだろう。実際は副業モデルなのだが、まあ追い払えたからどうでもいい。

「当真って、男に興味ないのかな」

ぼんやり呟いた。これでも顔には自信がある。大抵の女性は俺に好印象を持ってくれる。しかし当真は俺の顔を凝視することは一度もなかった。彼女の目的はいつだって、種に苗、新種の作物だ。

モヤモヤする。

たまには俺を見たっていいのに。いや、別に見なくてもいいけど……

当真にも男の好みがあるのかな。……いやいや、俺には関係ないし。

だいたい、俺は来る者は拒まないけど、自分は追わない主義である。だって期待されたら困るじゃないか。変に希望を持たせて結婚の夢を見せてはいけない。

……でも、当真って結婚願望あるのか？ どう見てもなさそうなんだけど。

ということとは、当真と付き合うのは意外と悪くないのかもしれない。気楽そうだし、後腐れもなさそうだし、執着もしなさそうだし都合がいい……そう、当真は俺にとって都合のいい女なのか。なんか、俺、どんどん最低男の思考になっていないか？

さすがにちょっと凹んでしまつて、首を横に振つて思考を切り替える。

やがて駅に到着して、疲れ果てたサラリーマン達に埋もれるように、混雑した電車に乗る。

ゴトゴト揺れる車内。ぼうつと車窓から見える夜景を眺め――

都合がいい悪いはともかく、俺は当真のことを、以前からちゃんと異性として見ていて、意識していたんだなと漠然と思つた。

なんともはつきりしない気持ちを抱えたまま毎日を過ごして、一月中旬に入ったころ。

昼休みに、俺はとある女性社員に声をかけられた。

ふたりきりで話したいと言われ、なんとなく、その話がなんなのかを直感する。

予想通り、彼女は「御影さんとお付き合いしたい」と言つてきた。今の俺がフリーなのは、すでに会社のほとんどの人が知つている。総務の仁科があれだけ言い回つたのだから、当然とも言える。いつもの俺なら、軽い調子で「いいよ」と頷くだろう。

告白してきた子はなかなか可愛い顔をしていたし、性格が悪そうにも見えなかった。

――でも。

「悪い。しばらく、彼女を作らないつもりなんだ」

俺は初めて、断りの言葉を口にした。

頭によぎつたのは、当真の顔。あいつの存在が頭の中にチラつく間は、別の誰かと付き合うのは酷く不誠実に思えたのだ。……決して誠実ではない俺が言えた義理ではないけれど。

「ごめん。君が嫌とかじゃなくて、今は誰かと付き合う気になれないんだ」

名も知らない女性は、悲しそうな表情を浮かべた。俺はせめてもの気持ちで、微笑んだ。

さて、初めて告白を断つた週の休日。

彼女いない歴零年に近い俺は、時間を持て余していた。

「……いなかつたらいなかつたで、暇なんだよな」

特に趣味を持たない俺は、休日といえはだいたいデートに勤しんでいる。デートのない日も、コミュニケーションアプリで彼女と世間話していることが多い。

結婚はしたくないが、これでもマメなほうなのだ。それに、意味のない世間話を続けるのも嫌じゃない。

「今日は晴れてるなあ。散歩でもするか」

雨だつたら、ネットのオンデマンド配信で適当な映画でも見るしかないが、晴れていれば外に出たい。家の中に引きこもるのはあまり得意ではないのだ。ちなみに保田は超インドア人間なので

『意味もなく外に出たがるお前の気持ちがわからん』と言っていた。

コートを着込んで、マフラーを巻き、スマホをポケットに突っ込んで家を出る。

俺が住んでいるのは、二十四階建てのマンションだ。職場のあるビジネス街まで電車で三十分ほどかかるが、落ち着いた雰囲気が気に入っている住宅街の一角にある。

一月最後の休日。マンションの玄関をくぐると、キンと冷たい空気が頬を刺した。ネットの天気予報によると今夜は雪が降るらしいし、なかなか冬らしい寒さと言える。

さて、どこに行こう。近くのカフェで雑誌を読むか、行きつけの美容院で髪を整えようか。それとも……

「ん？」

しばらく考えながら歩いていると、ふと、うしろから人の気配がした。誰かが同じマンションから出てくるようだ。なんとなく気になって振り返る。

「え、と、当真!？」

なんと、マンションの玄関から出てきたのはウチの研究員、マッド当真だった。

彼女はいつもの黒縁眼鏡に、ベージュのニットワンピース、黒いレギンスという私服姿で、小ぶりの黒いリュックサックを背負っていた。俺に気付くことなく、すたすたとどこかに向かつて歩いて行く。

ちょっと待て。あいつ、俺と同じマンションに住んでいたのか!? 通勤時も、退社時も、まった

く出会うことがなかったから、気が付かなかった。

うーん、世間は狭い。それにしても、当真はどこに行くつもりなんだろう？

思わず、彼女の後を追った。暇つぶしにしては趣味が悪い。これでは単なるストーカーだ。

でも足を止めることはできなかった。当真は社内の変人として有名だが、彼女のプライベートは謎に包まれているのだ。前に研究棟で、なんとなく当真について尋ねたら、皆、彼女が休日は何をしているかは知らないようだった。特別仲のいい同僚もいないらしい。

だから、これは好奇心だ。ちょっと様子を見て帰ればいい。研究オタクな当真のことだから、イメージとしては本屋とか、図書館だな。

はっ、まさか……デートだったりするのだろうか。周りに言わないだけで、実は当真には恋人がいるとか。

そう考えた瞬間、グサツと自分の胸に針が突き刺さったように痛くなった。

な、なぜ、ショックを受けているんだ。やめてくれ。当真は付き合ってもいいタイプかなって思いかけているけれど、好きってわけじゃないし。……多分。

し、しかし、本当にデートだったらどうしよう。

当真が誰と付き合おうが俺には関係ないはずなのに、なぜだか心がざわざわする。

なんとも言えない気持ちを抱えながら当真のうしろを歩いていると、彼女は公園のような広場に入ってしまった。

いや、あれは公園じゃない。よく見たら、フェンスの前に『ハレバレ共同菜園』と記された看板があった。

共同菜園とは、このあたりの住民が畑を借りて家庭菜園をする場所のことだ。つまりあいつも、自分の菜園を持っているということか？

……というか、仕事でも同じようなことをしているのに、休日も作物育ててるのか、あいつ。

当眞は共同菜園の中にある大きなコンテナから鍬とスコップを取り出した。そして畑の一角に移動して、土を耕し始める。

俺はインドアよりアクティブ派だけど、さすがに休日に土いじりする趣味はない。しかもこんな寒い日に、何が悲しくて土まみれにならねばならないのか。

当眞、何育ててるんだらう……

俺がぼんやり彼女を眺めていると、当眞はふいに、クルツとこちらを振り向いた。

あ、やばい。

「御影さん！ やはり御影さんだったのですね。いや、こんなところで会うなんて奇遇ですね」にこーっと笑う当眞の頬には、早くも泥がついていた。

「あ、いや。うん、そうだな」

まさかお前の後をついてきた、なんて言えず、俺は曖昧な笑みを浮かべた。

「もしか、家庭菜園に興味がおありなんですか。意外ですね」

「いや！ そういうわけじゃない」

「またまた。さつきから視線には気付いていましたよ！ 熱心に土を見ていましたね。なかなかいい土でしょう。私が育てた土ですから当然ですね」

えっへん、と胸を張る当眞。

違う。見ていたのはお前であつて、土じゃねえ。

「当眞こそ、休みの日まで土いじりなんてご苦労なことだな。野菜でも育てているのか？」

こんな真冬に育つ野菜はかなり限られているけれど。

すると当眞はとろんとした垂れ目を睨り、にんまり笑った。

「ふふふ、見られてしまったからには仕方ない。実は、ここは私の秘密の実験菜園なんですよ」

「実験……菜園？」

首を傾げると、当眞は背中のリュックサックを下ろして、中から小さなビニール袋を取り出した。

「はい。家のベランダでいろいろ品種改良をしては、ここで実験的に作物を育てているんです。今は、冬の土でも発芽できるような、寒さに強い種を試作しているんですよ」

「へえ……」

俺は目を丸くする。純粹に驚いたのもあつたが、納得もした。

当眞の研究成果はすこぶる良い。画期的な品種や、発芽率の良い種をいくつも作り出している。人によっては『偶然』だとか『運がいい』などと言っているが、違うんだ。

彼女は地道な努力をして、仕事の研究に繋げている。ただそれだけなんだろう。

まあ、研究オタクには違いないけど。休みの日まで研究しているなんて、本当に好きなんだな。でも、そこまで熱中できる何かがあるのは、少しだけ、羨ましい。

そんなことを考えていると、俺の目前にニユツとスコップの柄が突き出された。

「わっ、なんだ」

「ここで会ったのも何かの縁ですから、手伝ってくださいよ」

「え、嫌だ。面倒臭い」

「そんなこと言わずに。ちょっとその土を掘り返して下さるだけでいいのです。深さ一メートルくらい」

「めちゃくちゃ重労働じゃないか!」

「たくましい腕の使いどころですよ! ほらっ、御影さんのいいところ、見てみたい!」

ばんばんとリズムよく手を叩く当真に、俺は噛みつく。

「宴会のノリで頼むんじゃない! まったく……」

はあ、とため息をついた。好奇心から、彼女のあとをついてきたのが間違이었다。仕方ない……ここで無視して帰るのも、なんだか気が咎める。

「掘り返しただぞ」

「はい。ありがとうございます」

につこりと、当真が嬉しそうに笑った。

——あ、またその笑顔。ほんわりと、可愛い花が咲き零れるような。

いやいや、見蕩れてなんかいない。俺は当真から軍手を借りると、スコップの柄を握りしめ、土を掘りはじめた。

ざっく、ざっく。

畑作りと真逆の人生を歩んできたような俺は、無心になって土を掘る。

こんなに土まみれになった日は今までの人生になかったかもしれない。幼少から学生時代まではキラキラと輝くようなモデル業界に身を置いていたし、農作物に触れるといえばスーパーに並んでいる綺麗な野菜だった。

まあ、こんな業種に就いているから、契約農園に行くことは多いけど、実際に鍬やスコップを握ったことはない。なんというか、この俺に土いじりをさせる当真は、ある意味怖い物知らずではないかと思う。

ふと、当真を見た。彼女は近くの畑の前でしゃがんで、土に肥料をやっている。

その横顔はなんだか楽しそうだった。鼻歌まで歌っている。

「当真さ、休みのたびにここで園芸してるのか?」

「はい、そうですよ」

「こんなことばかりやってて、人生楽しいのか？」
「もちろんですよ」

当真はきつぱり断言して、近くにあったじょうろで水をやる。

俺はようやく掘り返しを終わらせて、スコップを土にザクツと押し込むと、軍手を外してハンカチで額の汗を拭いた。

「……男、とかさ、興味ないのか？」

ぼろっと言葉が口から零れる。ぱつと口を手で塞ぐも、もう遅い。

「おとこ、ですか？」

振り向いた当真が、驚いたように目を丸くする。

「い、いや、彼氏ほしいなとか、当真くらい年齢なら思うものじゃないか。つて、当真って何歳だっけ」

「私は二十八歳ですよ」

「俺とタメなのか。なんか意外だな……。顔が可愛いからか」

またも本音が出てしまった。さつきから俺はなにを口走っているんだ。しかし当真が二十八だったとは。ぜんぜん見えない。でも、院卒って話だから当然といえば当然の話だった。

「二十八といえば、世の女性は、結婚を意識するもんじゃないか？」

実際、俺と付き合った女性すべてが、結婚を口にした。俺が結婚は考えていないと言うと、怒っ

たりあるいは落胆したりして、別れを告げていった。

どんなに好きだったとしても、結婚しない男は願い下げらしい。

「うーん。特に結婚は意識していませんね。でも、縁があればするものじゃないですか？」

「気楽なやつだなあ。男友達やって遊びたいか思わないのか？」

「全然。それよりも研究したいです」

ニコツと笑顔を向けた。

……当真は、俺とまったく違う人種だ。わかりあえる気がしない。彼女の頭の中は研究だけで、異性と付き合いたいという願望がないのだ。

でも、結婚を意識してないというのはいいな。うん、付き合ったら気楽そうだ。そこは大変好印象である。

しかしそんな理由で当真を誘うほど、俺は落ちぶれていない。ろくでなしのギリギリラインではあるが、自分から誘うならちゃんと好きにならないとダメだと思う。相手に誘われたならもちろんオールオックーだけど、当真は男に興味ないみたいだな。残念。

「んじゃ、俺はこれで帰るわ」

「えっ、手伝って下さったんですから、お礼しますよ」

「お礼って、なにをしてくれるんだ？」

「そのコンビニで、元氣百倍ドリンク剤を奢ってあげます」

「いらねえ！」

怒鳴りながら断ると、俺はきびずを返してのしと菜園を出て行った。うしろから「ドリンク剤、嫌いなのかな？」と、思わずずっこけそうなほど抜けた当眞の言葉が聞こえた。

休み明け――

なんだかちつとも休んだ気がしない、だるい身体をもてあましながら、ふああとあくびをする。

「はよーっす」

デスクに肘をつく俺の横に、保田が来た。

「はよー」

「なあ、その廊下で聞いたんだけど」

「うん」

「御影って、家庭菜園が趣味ってマジか？ 意外すぎて笑いそうになったんだけど」

「ばたつとデスクの上に突っ伏した。」

「そんなわけないだろ！ 誰だ、そんなデマ言いふらしたヤツは！」

「廊下のやつも、人伝てに聞いたみたいだけど、研究棟からの情報らしいぞ」

「当眞あゝっ！」

噂の発端はいつだ、間違いない。そういえば、俺が家庭菜園に興味があると誤解していた。

「頼むから、俺のあることないこと言いふらすのやめてくれよ！」

誰それと別れたとか付き合ったとか、趣味だとか、俺に関することはすぐ噂になってしまう。なぜだ。そこまで目立つつもりはないのに！

「なんだかんだ言っつて、御影って話題になりやすいんだよな。顔がいいし、仕事もできるし」

「人畜無害とは言わないが、誰かに迷惑かけてるわけでもないだろうに。俺のことなんか放っておけよ」

「そりゃ無理だ。なんだって『結婚しない王子様』なんて恥ずかしいあだ名までついてるんだから」

「恥ずかしい言うな。その通りだけど！」

「はあ、とため息をつく。」

その日を境に、以前女性社員からの誘いを断ったことも相まったのか、『御影は家庭菜園に目覚め、女性との付き合いをやめて悟りの領域に入った』などという噂が流れ、そのうち出家するのは、という話にまで飛躍してしまった。

俺としてはもはやどうでもいいという認識だ。皆、好きに言えればいい。誤解を解くのも面倒くさい。すべてはあの日、当眞のあとをつけた俺が悪かったんだ。

あの子やだと当眞は、俺の彼女になりたいと言いつつ出さず気配もないし、もう今後一切、あいつには関わらないと心に決めた。



二月――

世の中はバレンタインデーを前に、浮き足立っている雰囲気だ。しかし俺の会社は社内でのチョコの受け渡し禁止になっているので、そこまでの盛り上がりは見せていない。冬の寒さはここ極まれりといったところだ。朝は手がかじかむほどである。

「あー、寒っ」

ゴミ袋片手に出勤時にマンションを出ると、空は曇天どんてんだった。朝日がないとどうにも調子が出ない。生あくびをしながらマンションの横手にあるゴミステーションに行くと、ちょうどそこに当眞がいた。

「おはよ――」

挨拶あいさつしようとして、むぐつと口を閉じる。あいつとは関わらないようにしようと思いに決めたばかりじゃないか。無視無視。他人他人。

当眞は俺に気付くことなく、ゴミステーションにゴミ袋をポイツと捨てて、すたすたと歩いて行く。

……ちよつと待て。あいつのゴミ袋、小さすぎじゃないか？

ひとり暮らしをしている俺でさえ、一週間に二回ある回収日はゴミ袋がいっぱいになる。あいつが持っていたゴミ袋は、俺の量の三分の一くらいの大きさだった。

ちゃんと生活できているのか？ きちんと食べているのか？

ダメだ。こんなことはしてはいけない。でも、ちよつとだけ。どうしても気になる。

チラ見するだけだから。それでも女性のプライベートだ。あんな変人研究オタクでも、一応年頃の女性なのだから――

頭の中で様々な思いがひしめくも、俺はついつい、当眞のゴミ袋を横目で見てしまった。すると、半透明のゴミ袋から透すけて見えていたのは。

「あいつ……まさか、こんな食生活をしているのかっ!？」

当眞のゴミ袋には、エナジーバーの空袋だらけだった。ちなみに全部同じメーカーだ。そしてインスタント味噌汁の空袋も大量に入っていた。というか、彼女のゴミ袋にはそれしか入っていない。俺は深いため息をつく、自分のゴミ袋をポイツと放り投げた。

その日の夜。俺は早めに仕事を切り上げて帰り、マンションの玄関前で当眞を待ち構えていた。いや、関与しないようにしようと思ったんだが、あれはさすがに見過ごせせない。

当眞がどうなるうが俺には関係ないのだが……でも、ちよつとあれはない！

一言注意くらいはしておかないと。その、これは同じ会社で働く同僚としての義務なんだ。他意

はない。ないったらない。

俺はなにをしているんだろう……

ため息をつき、最近ため息が増えたと思う。間違はなく当眞のせいだ。

モヤモヤした気持ちでいると、ようやく当眞が帰ってきた。肩にビジネスカバンをかけて、手にはエコバッグを持っている。

「当眞！」

「おや、御影さんですか？ どうして私のマンションの前で仁王立ちなんてしているんですか？」

「仁王立ちじゃない。普通に立ってただけだ。あとここには俺も住んでるんだよ」

「ええっ！ ぜんぜん知りませんでした！」

俺もつい最近まで知らなかったよ……

「当眞。えっと……さ」

どう話を切りだそう。俺はぼりぼりと頬を掻きながら思考を巡らし、思いついたことを話してみる。

「その、研究棟で小耳に挟んだんだが、当眞つてもしかして、食事はいつもエナジーバーなのか？」

「はい。そうですけど？」

「そうですけど、じゃない！ お前、まさか毎食ソレだけとか言わないよな？」

「まさか、インスタント味噌汁もついていますよ」

はははと明るく笑う当眞に、俺はがつくりと肩を落とす。そして彼女の肩を掴むなり、怒鳴った。

「このバカもの！ どうりで小柄すぎると思った。そんな生活じゃ身体を壊すぞ！」

「ええ!? だ、大丈夫ですよ。エナジーバーは完全食ですから」

「完全食じゃない。それはあくまで栄養を補助する食品なんだ。そしてインスタント味噌汁は塩分が多めなんだ。毎日飲んでいたら身体に悪い！」

俺の必死の訴えに当眞はずれた眼鏡でぼかんとした顔をして「へー、そうなんですか……」とのんびりした口調で言った。

「とにかく、まずは野菜を食え」

「あ、野菜ジュース飲んでますよ、たまに」

「たまに!? 野菜はジュースだけじゃなく、ちゃんと新鮮な野菜を食べないとダメなんだ！」
俺が頭ごなしに怒鳴ると、当眞は顔を引きつらせて一歩うしろに下がった。

「い、いや、ちよつと野菜は苦手ですわね」

「野菜の品種改良しておいて、野菜嫌いとはどういうことだ」

「それとこれとは別なんですよ。あ、ベランダでできた野菜はちゃんとジュースにして」

「——もういい」

俺はそう言うなり、当眞の手首をむんずと掴んだ。

「ひゃっ!?!」

驚く当真に目を向けず、彼女を引きずるようにマンションの玄関をくぐる。

「えっ、えっと、御影さん、どこに行くおつもりで？」

「俺の部屋だ」

「ほう、オレノヘヤ……。ええーっ!? どうしてまた!」

ぎゃんぎゃん騒ぐ当真をエレベーターに押し込み、階数のボタンを押した。

「俺は、幼少時代はベビーシッターに育てられていたんだ」

「はあ。失礼を承知でお尋ねしますが、お父さんやお母さんは？」

「父と母は多忙で、ほとんど家にいなかった」

俺が淡々と答えると、当真は口をつぐんだ。

「ベビーシッターの作る料理は、正直言って、おいしくなかった。それで俺は自然と料理を覚えて、必要な栄養素も調べるようになった。人は、毎日きちんと栄養を取って、十分な睡眠を取れば、そう身体を壊さないんだ」

「はあ、それ、小さいころからされていたんですか？ しっかりした子供だったんですね」

当真の言葉に、俺は前を向いたまま小さく笑った。

「俺が体調を崩せば周りの大人が迷惑する。そういう世界で生きていたから、体調管理も仕事のうちだと思っていたんだ」

モデル業は、俺ひとりで成り立つ仕事じゃない。俺が風邪を引いたら当然スケジュールは狂い、

各方面の人達を困らせる。ビジネス脳の母は当然文句を言うし、それを聞くのはうんざりする。だから俺は、自分の管理は自分でするようになった。

思えば、可愛げのない子供だった。外面そとづらだけは良かったけど。

「だから、御影さんは——なんですね」

ほそ、と当真が呟いた時、ちょうどエレベーターが止まった。ガコンと扉が開いて、俺はうしろを振り向く。

「なにか言ったか？」

「いえ、なにも」

当真は、にへらと笑った。

俺は気を取り直して自分の部屋に向かい、鍵を開けて中に入った。

「ほら、入って」

「は、はい。本当にいいのかな……。？ お邪魔します」

当真が間延びした声を出しながら、俺に続いて靴を脱ぐ。

リビングに入って照明を点けると、当真は感心したような声を出して辺りをきよろきよろ見回した。

「おお……。なんだかオシャレなお部屋ですね」

「同じマンションなんだから、間取りは当真とこと変わらないだろ」

「置いてあるものがまったく違いますよ！ どうして床に何も落ちてないんです!？」

「お前んとこは何が落ちてるっていうんだよ！」

もともとシンプルが好きで、ごちゃごちゃと飾るのは好きではない。リビングには壁掛けタイプの大型テレビとガラス製のローテーブル、そしてソファくらいしか置いてあるものはない。

俺はビジネススーツの上着を脱ぎ、ハンガーにかけてから、キッチンの傍に置いたままの黒いエプロンを腰に巻いた。

「そのソファに座ってる。テレビでも見ていてくれ」

「はあ、ではお言葉に甘えて」

当眞は大人しくソファに腰掛けると、リモコンを手を取った。

彼女はいくつかチャンネルを変えたあと、バラエティ番組を見始める。

俺は冷蔵庫を開けて、手頃な材料を作業台に置いていった。当眞がどれくらい食べるのか知らないが、今は夜だし、脂っこい料理よりは軽く食べられるようなもののほうがいいだろう。

「パスタにするか」

腕まくりをして、鍋に水を張る。

そして二十分ほどかけて夕飯を作ったあと、俺は料理をカウンターテーブルに置きながら当眞の名を呼んだ。

「当眞、できたぞ」

「あつ、はい。先ほどから大変おいしそう匂いがしていたので、実はお腹がぐーぐー鳴っていました」

「それはなによりだ。たんと食え」

テーブルに並べたのは、サーモンとほうれん草のクリームパスタと、根菜たっぷりコンソメスープ。それから海藻サラダだ。

「うわ……野菜がいっぱいですね……」

「野菜嫌いでも食べられるように味付けしたから、黙って食え」

俺が当眞を睨みつけると、彼女はしぶしぶと椅子に座る。俺は隣に座って、エプロンを脱いだ。

「いただきます」

当眞が手を合わせて言ったあと、フォークを持ち、海藻サラダを恐る恐る食べ始める。

「んっ？」

きらん、と当眞の目が光った。

「これ、このサラダ、おいしいですよ。海苔の風味が生野菜の苦みを緩和させています」

「それはチョレギサラダにしてみたんだ。ドレッシングもごま油を使っているから、香ばしくて食べやすいだろ」

「ちよれぎ……？ はい。これならおいしく食べられます」

当眞はぱくぱくとおいしそうにサラダを食べ進める。次に、根菜スープに手を伸ばした。

「すごい。レンコン、大根、ごぼうににんじん。いっぱい入ってますね」

「旬の野菜を食べるのが、一番栄養になるんだ。身体も温まるし、野菜スープからはかなりの恩恵おんけいが受けられるんだぞ」

「そうですね。確かに、季節に適した野菜の栄養価は高いと、データにも出ています」

当眞は感心したようにスープを見つめたあと、スプーンで具材をすくって食べる。

「はあ……これは温まる。優しい味付けで、ほっこりしますね」

レンコンを味わって、当眞は幸せそうな表情を浮かべた。

そうやって素直に味わっている顔は、こちらがどきりとするほど可愛らしい。完全に気の抜けた顔。当眞の無防備な笑顔から、どうしても目が離せない。

今までいろいろな女性のさまざまな笑顔を見てきたはずなのに、当眞の表情には特別なものを感じた。俺は、以前から当眞の表情に心を奪われていたのだ。そのたびに気の迷いだと思いついて、考えないようにしていたけれど。これは、そういうことなんだろうか。

「うーん……」

「御影さん、スープを覗のぞんでどうしました？」

「えっ？ あ、いや、なんでもない」

当眞に話しかけられて、慌ててフォークを持つとパスタを食べた。彼女はそれ以上は追及せず、気を取り直してパスタをフォークに巻きつける。

「んんっ、これもおいしいです。ほうれん草は苦手だったのですが、これならいくらでも食べられそうです。クリーミーで、サーモンとほうれん草がグッドなマッチです！」

当眞はクリームパスタが気に入ったようだ。

「野菜が苦手でも、こうやっていろいろ工夫を凝らせばおいしく食べられるんだ。そうやって慣らしていけば、そのうち、もっとシンプルな料理でもおいしいと思えるようになる。それが苦手野菜を克服する一番早い方法なんだよ」

「はあく、すごいですね、御影さん。なんだかお母さんみたいです」

「誰がお母さんだ」

当眞にツッコミを入れて、ぱくつとパスタを口に入れた。

……しかし、俺。今更だけどなにやってんだろう。当眞をうちに入れたり、メシを食わせたり。まるで彼氏気取りじゃないか。当眞がどんな食生活でも放っておけばよかったのに、どうしてあの時、我関せずを貫けなかったんだろう。

それはやっぱり、俺の中に好きという気持ちがあったから。俺のことを好きになってほしいと、そのために世話を焼きたいと、そういう願望を持ったからか。

自分で自分が信じられないが、自分の行動から見ても、そうとしか思えない。

俺はどうやら、当眞のことが、好きだった……のか。

「マジか」

思わず頭を抱えた。実は、俺は恋を自覚したことは一度もない。もちろん女性に告白したこともなく、俺はいつも『言われる側』だった。それで、顔が好みだったらまあいいかって感じで付き合っていたのだ。恋は落とすものであり、落ちるものではないと思ひ込んでいたのだ。

執着もしないし、愛情も薄い。付き合っている間はそれなりに大切にされるけど、それだけだ。相手が別れようと言ったらすぐに関係が切れるような、淡泊な感情しか持っていなかった。

親があんなだし、俺も冷めた人間だったから、恋・心とは縁がないと思っていたのに、まさか自覚する日が来ようとは。しかも相手はマッド当真だ。

「さつきから苦悶の表情を浮かべていますが、お腹でも痛いのですか？」

パスタを綺麗に食べ終えた当真が心配そうに俺を見上げる。

どこか幼さの残る童顔に、とろんとした垂れ目。まじりけない黒い髪。柔らかそうな唇。

「なっ、いや、大丈夫。腹は痛くない」

知らなかった。恋とは、理性ではなく本能でするものらしい。俺の理性は『なんでよりもよって当真なんだよ』とツツコミを入れているが、本能は『仕方ないだろ、好きになったんだから』と訴えている。

「ごちそうさまでした。とてもおいしかったです」

当真は満足そうな笑顔を見せた。お腹をさすって、満足そうなため息をつく。

そういう俺、当真のこと、なにも知らない。知っているのは、研究大好きで、休日も研究のた

めに土いじりしてる研究オタクということくらいだ。あと食事がエナジーバーとインスタント味噌汁。

もっと他のことを知ってみたい。もっと他の表情を見てみたい。

考えれば考えるほど、当真への興味が増した。知りたくて知りたくて、たまらなくなる。

「ところで御影さん、どうして私に食事を作ってくれたんでしょう」

ふと、当真が疑問を投げかけた。俺はハッと顔を上げる。

「確かにエナジーバーやインスタント味噌汁では得られない満足感がありましたし、正直助かりましたけど、私がどんな食事をしようと御影さんには関係ないのでは……？」

心底不思議そうに当真が首を傾げる。

俺はごくりと生唾を呑み込み、意を決した。

「と、当真が」

彼女ののろんとした目が、俺を見つめる。

「好き……かもしれないから、だ」

まだ確証はなかった。そうじゃなかったらどうしようという気持ちだが、俺の告白を曖昧なものにする。しかしここまで言ったなら後には引けない。俺は当真の手首をガシッと掴んだ。

「だから、どうだろう。俺達、付き合ってみないか？」

当真の目が驚きに丸くなる。そして、ぼかんと開いた彼女の口が、言葉を紡いだ。

「え、嫌です」

がくつと首を垂れてしまう。人生で初めて告白して、しかもフラれた。こんなにも即答で断られるとは思わなかったし、ちよつと……いや、かなりショックである。

「なぜだ!？」

「私は御影さんのこと、好きじゃないかもしれないので」

当眞の眉間にむつと皺が寄る。曖昧な告白には曖昧な答えをと言わんばかりに、当眞の返事は俺の告白に似ていた。

ああ、いや、今のは俺が悪い。『好きかもしれないから付き合ってくれ』なんて、いい加減もいところだ。さすがの当眞もその気になるはずがない。

「すまない。かもしれないというのは失礼だった。でもこんな気持ちは正直初めてなんだ。自分でも戸惑っている。しかし当眞のことは、前からずっと気になっていたんだ」

真面目な顔で話す。

「そうなのですか?」

当眞が驚きの声を出した。俺は頷き、頭をぐしゃりと掻きむしる。

「気にはなっていたけど、気のせいだと思いついてしまった。でも、お前が営業部に来るたび、俺はいつもモヤモヤしていた。関わらないようにしようと思いついて、視線は外せなかった」

嗅覚が人間レベルを超えていて、サンプルなどを持って帰ると、必ず営業部にやってくる当眞。

狙いが俺だけなら問題なかった。でも当眞は、俺以外にも視線を向けていた。

それがどうにも嫌で、不愉快で。心の中に暗雲が立ちこめて。

ああ——、今なら認める。俺は当眞に執着の気持ちを抱いていたのだ。

「頼む! しばらくの間でもいいから、俺と付き合ってみて欲しい!」

もつと知りたい。もつと見たい。そのためには、もつと距離を縮めるしかない。

ぱん、と手を合わせて拝むと、当眞は考え込むように「うくん」と腕を組んだ。

「そう言われても困りますね」

「お試してもいいから!」

「お試し……つまり実験のようなものですか?」

「実験とは少し違つが、当眞に対する思いが本物かどうかを確かめてもらうためには、やっぱり付き合ってみないとわからないと思うんだ」

俺が必死で説得すると、ようやく彼女は納得したように頷いた。

「なるほど、理に適つてますね。不確かなことは検証をしないと答えができませんから」

当眞のくせにインテリ理系みたいなことを言い出した。いや、間違はなく俺より頭がいいはずなんだけど、当眞は個性的すぎて、いまいち『秀才』というイメージがつかない。

俺が黙って様子を窺っていると、当眞はしばらく目を瞑つて考えたのち、顔を上げて俺を見た。

「実は、私がかねがね疑問に思っていたことがあるんです」

「それは？」

「恋心とは、なにをきっかけに湧き上がるのか。恋をすると、どのような思考の変化をもたらすのか。予想のつかない突然変異による感情なのか、それとも種が芽吹くように感情を育てた結果なのか。……私は、恋をしたことがないから、恋による気持ちの変化がわかりません」

どこか真面目な様子で当真が言う。黒縁眼鏡の奥にある、透明度のある黒い瞳に魅入られそうになりながら、俺は人差し指で頬を掻いた。

「そうロジカルに考えるものじゃないと思うけどな。むしろ恋って直感的なものだろ」

「ええ、そうかもしれない。私も、直感で……本能で、恋を試してみたい。小難しいことを考えないで、感覚的に行動するのは楽しいのかもしれない、とずっと思っていました」

そう言うと、当真はゆつくりと俯いた。長い髪が一房、肩に落ちる。

「……私も恋を試してみたいんです。御影さんは、私を恋に落とせますか？」

それは挑発にも聞こえたが、願いのようにも聞こえた。

恋を試してみたい。俺と同じように、当真も恋心と縁のない人生を送ってきたのだろうか。彼女が今までどのように生きていたのか知りたいし、俺に教えられることがあるならなんでも教えてあげたい。

俺は当真の肩を掴んだ。想像以上に彼女の身体は柔らかくて、華奢で。どきりと心が弾み出す。

「——お望み通り、めろめろにしてやるよ。問答無用で恋にたたき落としてやる」

そう言うと、当真は顔を上げてにへらと笑った。

「それは楽しみです」

「そういう軽口も言えないくらい、夢中にさせてやるからな。覚悟しろよ」

「ふふ、百戦錬磨な御影さんが言うと、真実味がありますね」

おどけた様子で笑う。どうやら彼女も、俺の噂は多少なりとも聞いているらしい。『結婚しない王子様』とか、研究棟でもいろいろ言われているんだろう。

俺は真剣に唇を引き締めて、当真を見つめる。

「お試しとか言ったけど、俺は遊びのつもりじゃないからな」

「……浮気の心配がなさそうなのは、安心かもですね」

「どういう噂が流れてるか知らないけど、俺は誰かと付き合ってる間に、浮気したことは一度もない」

遊び人と言われようが、とつかえひつかえと言われようが、それだけは絶対のルールとして決めている。俺が言えたことじゃないけど、そのあたりは誠実であるつもりだ。

俺の言葉に、当真は少し驚いたような顔をしたが、ほんわりと微笑む。

それは、俺がいつも可愛いなと思ってしまう、花が綻んだような笑顔だった。

「わかりました。信じますね」

「ああ。だから当真も、俺と付き合ってる間は余所見するなよ。会社でも」

これが言いたかったんだ。ちょっとずつきりする。お前は俺だけ見ていればいいんだ。他を見るな。

俺は当眞の顎を摘まむと、ゆっくりと距離を縮めた。

「これからは——名前で呼んでくれ。汐里」

ちゅ、と。軽く口づける。汐里の唇は思ったとおり柔らかくて、ずっと触れていたいと思った。

「御影さん……私の、名前……知ってたんですか」

「名前」

「あつ、えつと……知基、さん」

汐里は俺の名前を呟くと、照れたように俯いた。

「流されるようにしてしまいましたが、私、キスは初めてなんですよ」

「そっか。初めての相手が俺でよかったな」

「……どうですか？」

首を傾げる汐里の頬を、そつと撫でる。

「俺はキスがうまいからだよ」

そう言つて、もう一度唇を重ねた。汐里は目を瞑つてキスを受けたあと、困り顔で笑い出す。

「すごい自信家ですね。さすがです」

俺もつられたように笑った。本当は冗談のつもりだった。実際はキスに上手いも下手もないと思

う。ただ、汐里の唇はふわふわして気持ちが良いくて、控えめに唇を動かすのが初心そうでいらしくて、愛しさのような気持ちで心を満たしたから、優しくできただけ。

俺は今までにない満足感を覚えながら、黙って汐里を抱きしめた。